

 Takuro Someya Contemporary Art

あいちトリエンナーレ2010/山下麻衣+小林直人

山下麻衣+小林直人が『あいちトリエンナーレ 2010』に参加しています。
この機会に是非ご高覧ください。



展覧会情報

「あいちトリエンナーレ 2010」

【会期】 2010/8/21～10/31

【会場】 名古屋・納屋橋会場

<http://aichitriennale.jp/>

ライターの白坂ゆりさんが執筆してくださった文章を以下に転載させていただきます。

山下麻衣+小林直人

現在ベルリンを拠点に国内外で発表している1976年生まれの山下麻衣と1974年生まれの小林直人の現代美術ユニット。自然や生物など自分ではコントロールできないものや結果が予測できないことに関わり、その過程と結果を、映像作品及びインスタレーションとして制作。近年は、レジデンスに参加することが多く、そこにある条件や要素から作品をつくったりもしている。

個人的な趣味かもしれないが、ターザンの声を動物に聴かせる《TARZAN》は面白いが、ライオンがキャンパスをかじったり引っ掻いたりして絵画風になる《Lion & Canvas》にはむしろアートの定石やねらいを感じて面白味を感じることができずにいた。だが、「あいちトリエンナーレ2010」の納屋橋会場で発表中の《メインストリームを行く》は面白い。2面のスクリーンに、ナイル川とアマゾン川をボートで下る2人の映像が流れている。見る者にとってはただそれだけだが、メインストリームが1本じゃなくて、離れた場所で平行にあるという状況が好ましい。2人の表情に疲れもにじんできて、ナイル川では背後に遺跡も見えたりして、最後まで繰り返し見ても飽きない。壁に立てかけられた、実際に使われたボートに、隅田川を渡った島袋道浩作品を思い出したが、映像や写真が行為の

証拠や副産物のような島袋作品と異なり、映像作品として自律している。90年代に出始めた、形なきプロセスに向かった60年代生まれ以降の作家と異なるのは、70年代生まれ以降の作家は、形としてアウトプットしたものがいいかどうかまでが判断基準にあることだ。

と同時に、山下+小林の場合は、映像に撮られた結果が氷山の一角であることを示す。5個のサイコロを振って何度もゾロ目が出る《miracle》は、実際には2か月毎日サイコロを降り続けて出た場面をつないでいる。交互に1000回テレパシー交換を行い、思い描いた絵を言葉抜きで当てる実験《telepathy》も当たった10回のみを使っている。世の物語やメディアは「奇跡」を強調するが、そのような当て外れが膨大にあることを示しているともいえるし、希少な「当たり」を単なる偶然と見るかあるいは法則として表せるものなのか、訓練次第では向上させられる人間の能力なのか、などと写っていないものに対して思いは広がる。

彼らはむしろ退屈な日常を徹底して受け入れ、そこにも何らかの好奇心を働かせているように見える。それは生きる力だ。ドイツ、バルト海に面した海岸で1000まで波を数えた《1000 WAVES》では、波の上に数字が振られている。岸辺に打ち寄せる地点で1とし、1000まで淡々と数える声を重ねる。数え終わった後も波は淡々と続いている。無為の作業を共同で行っているところがいい。共同作業に自分を超える面白さを見出すものの長くは続かない作家ユニットも多いが、通底音が合っている二人は相当続きそうだ。フィニッシュはどちらかが決めているのか聞いてみると、二人のどちらかが良いと思わなかった作品はボツにしているそうで、なかなか厳しいジャッジを課しているのだった。

海岸にて磁石で砂鉄を集め、その砂鉄から出た還元反応により鉄を抽出し、1本のスプーンを鑄造した《A Spoon made from the land》を見逃したのが悔やまれる。一方で、時間をかけなくても本質や層をとらえる境地に至る修行や長い旅路の途中のようにも思われる。でも今は、回り道を買って出るときだという思いがあるのだろうか。いや、あるいはできあがった一本のスプーンよりも、そこに至る時間が、結果にかかわらず苦しくも至福の時なのかも。時間に対する考え方が、絵画を描いていた人々らしいところなのかもしれない。絵画出身の映像作家も多いが、独自の領域へ進み出しているように思う。

2010/09/28 14:37 | コメント (0) | トラックバック (0) |